

新任の挨拶

## 私の教師修行と「文武一道」

宮城県仙台第二高等学校・校長 博士(教育情報学)

早坂 重行 (高37回)



同窓生の皆さま、今年度4月より、仙台二高第28代校長として、赴任いたしました早坂重行と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

高校第37回の同窓生であり、もう13年も経ちましたが、教諭としても、9年間お世話になりました。息子も本校にお世話になっており、硬式野球部保護者の会の会長も務めたことがあります。そして、教師の最終盤のキャリアにおいて、校長として母校に勤務することになりました。私の人生において仙台二高にはお世話になるばかりでした。浅学非才ではございますが、何とか少しでも恩返しができるよう、誠心誠意つとめさせていただきます。

さて、宮城県に教師として採用されてから、今年で35年目になり

ます。その間ずっと念頭にあったのは、「文武一道」です。高校の国語の教師として採用されたので、まずは国語の授業ができません。しながら、部活動の顧問もできて、教師としては一人前だと自分では思っておりまして。現在の教師の働き方改革のトレンドとは異なる考え方です。自分自身のスポーツ歴は、高校、大学とアルペンスキーにうちこみ、高校では東北大会、大学では全日本インカレに出場することができました。まあ大学の全日本インカレは3部での出場でしたが・・・大学は地元東北大学に運よく現役で合格することができたので、高校時代に少しは「文武一道」を達成することができたと思っておりましたので、教師になっても「文武一道」を目指したのかもしれない。教師としての初任地は仙台三高でした。仙台三高にはスキー部はなく、ハンドボール部の顧問に配置されました。それから仙台三高4年、築館高5年、仙台二高9年の計18年の間、ハンドボール部の顧問をやらせてもらいました。自分でプレー

の経験がないスポーツの顧問はた  
いへんでしたが、審判の資格を取  
るなどして勉強し、足りない部分  
はプレーの経験がある方と一緒に  
顧問をやり、あるいはコーチを頼  
んだりして、何とかやってきまし  
た。インターハイ出場を目指して  
やりましたが、監督としての最高  
戦績は何度か県ベスト4に入るぐ  
らいでした。それでも築館高の時  
は、県の新人大会で中学の時の県  
選抜が何人もいるような第1シー  
ドのチームを、全員中学時代ハン  
ドボール未経験者のノーマークの  
築館高校が破るといふ「ジャイア  
ント・キリング」を成し遂げたこ  
とがありました。結局、その時も  
県ベスト4まで進んで敗退するの  
ですが、この勝利はその後の私の  
教師人生に大きな自信となりました。  
仙台二高で、顧問をしたとき  
は、仙台市の大会で準優勝をした  
こともありましたが、才能ある選  
手たちの能力を開花させることが  
できなかったという後悔はありま  
す。しかしながら、教師として部  
活動を通して先輩、同僚の先生そ  
して生徒・保護者との関わりから  
学んだことは数多くあります。

程後期に入学し、博士号を取得す  
るために研究活動に取り組みまし  
た。私が、学問を深め、博士号を  
取得する目標を持つにいたったの  
は、現状の自分に満足してはいけ  
ない、人を教える教師は常に研修  
に努め、自分自身を磨いていかな  
ければいけないという思いでし  
た。もう一つ付け加えると、何年  
も前の自分の学生としての経験だ  
けでは本当の意味での深い進路指  
導はできないという強い反省もあ  
りました。自分自身が学生の立場  
でもう一度大学というものを見つ  
め直すことでより良い進路指導が  
できるのではないかと考えまし  
た。博士課程3年次には、1年間  
で、専門書百冊以上、論文50本以  
上は読みました。それから、論文  
は5本ほど書きあげました。研究  
活動はどうしても勤務時間以外に  
なります。真夜中あるいは早朝に  
おこなうことも多く、体力的には  
とてもきつかったです。それで  
も、なんとかやれたのは、二高時  
代に身につけた「文武一道」の姿  
勢のおかげでした。博士課程の後  
期に足かけ5年かかりましたが、  
二高の教師として働きながら、教  
育情報学の博士号を取得すること  
ができました。その学問の専門性  
は、教師として、そして校長とし  
ての私を大きく成長させてくれ  
ます。

校長として何とかここまでやっ  
てこられたのは、「文武一道」の  
精神のもと、教師修行をして得た  
視野、バランスに寄るところが大  
きいと痛感しております。高校時  
代に大事にしてきた心のありよう  
は、生涯に影響を及ぼすものなの  
でしょうか。

さて、現在の学校の状況ですが、  
男女共学化して、19年になり、学  
校としての対応も落ち着いてきま  
した。その間、伝統を重んじなが  
ら、平成の終わりから令和の今日  
にいたる激動する時代において、  
社会全体の変化が教育現場にもた  
らす幾多の課題に対して、先生方  
は真正面から向き合い、教育活動  
を不断に刷新し続けてきました。  
その成果の一端が今春の大学進学実  
績にもあらわれております。国公  
立医学部医学科の合格者数は、現  
役、現浪合わせて、どちらも全国  
の公立高校でNo.1の合格者を数え  
るなど、未曾有の成績を取ってま  
した。もちろん、大学入試において、  
合格者数の実績を競う時代ではあ  
りません。この点についての詳細  
は、本校ホームページの教育方針・  
学校長の挨拶で説明しております  
ので、お読みいただければ幸いで  
す。

これまで先生方の尽力で、生徒  
が「学びに向かう力」を育ててき  
ました。これからは現代的な生徒  
の安全・安心を第一義に、先生方  
の働き方改革も加えて、行事の再  
検討をしていかなければならない  
と考えています。あわせて、デジ  
タル学習基盤を活用した生徒の学  
習のさらなる自立化や先生方の業  
務量削減を考えています。校長と  
して21世紀の学びを創造していく  
ための舵取りをし、持続可能な学

校にするべく努めてまいります。  
仙台二高は昔から改革を進め、  
新しいことを取り入れてきた学校  
です。伝統を大事にしつつも、「学  
びの現代化」を進めてきました。  
これからも未来志向で、変化し続  
けていきます。

### 硬式野球部対一高定期戦への思い

頂上手前で不必要な装備をその場に残し、寒風のなか稜線を進む。  
体のバランス、足の運び、すべてが完璧だ。そしてついに、ベースキャ  
ンプを出発してから22時間後の夜中の2時、僕はクスマ・カングル頂  
上にゆっくりとアイスパイルを突き刺した。周囲には、この頂よりも  
高い山々が見渡せたが、心は満たされており、驚くべきことに体には  
まだ力がみなぎっているのを感じたのだった。

2年続けて失敗したヒマラヤクライミングに、ついに終止符を打つ  
ことができた。たしかに失敗により得られるものもあったが、成功で  
しか得られないものもある。

（傍線引用者『山と溪谷』850号「2006年6月号」CHRONICLE山野井  
恭史全記録より）

今年の入学生は高校第80回生に  
なります。そして、残念ながら、  
硬式野球部対一高定期戦におい  
て、敗北を喫し、連敗が続くこと  
になりました。

私自身（高校第37回生）の経験  
で恐縮ですが、もう40年ほど経っ  
た今でも記憶に鮮明に覚えている  
ことがあります。1年生の時の硬  
式野球部定期戦のことです。入学  
してすぐに、中学までは経験した  
こともないような理不尽な（現在  
の基準で考えると、です）応援練

習に参加し、その成果を試す舞台  
として、当時の宮城球場すなわち  
現在の楽天モバイルパークで、ま  
さに力の限り硬式野球部の応援を  
しました。しかし、結果は2連敗。  
完敗でした。ところが、応援団の  
幹部の先輩のリードにより「勝利  
の歌」を歌ったのです。「試合に  
負けても応援で勝ったのだ」と応  
援団の幹部の先輩はおっしゃいま  
した。しかし、高校1年生の幼かっ  
た私は正直「試合に負けたんだか  
ら、応援も負けたってことじゃな

いか」と思いました。「一生懸命応援したのに」という気持ちと相まって、とても悔しい気持ちであったことを覚えていきます。

今になって思えば、ここまで懸命に頑張った1年生に対する先輩のせめてもの労いの気持ちであったことは痛いほどわかります。そして、一番悔しかったのは、この応援団の幹部の先輩だったのでしよう。その時の応援団の先輩の気持ちを思うと切ない気持ちになります。

本校の校是は、いうまでもなく「文武一道」です。本校は現在、大学進学実績で優秀な成績を収めておりますし、そして運動部の部活動においても、団体競技では厳しいのですが、個人種目では、毎年複数の種目がインターハイに出場しております。文化部も頑張っていて、囲碁部の昨年度までの全国大会三連覇の偉業は広く知れ渡っているところだと思えます。このように「文武一道」の中で、生徒の「気持ち」を育てていくのが、本校の教育の真髄だと校長として考えております。

そこで、硬式野球部の対一高定期戦です。毎年五月に行われるこの「戦い」の注目度が、数ある学校行事の中で、同窓生、保護者、学校関係者を含めて、最も高いことは誰しもが認めるところです。昔ほどではありませんが、厳しい応援練習の成果の発表の場であ

り、新入生のみならず、在校生そして同窓生が二高に対する思いを再確認する機会です。しかしながら、冒頭に述べたように、連敗が続いております。最後に二高が楽天モバイルパークで勝利してから6年も経ってしまいました。

学校をあずかる校長の立場からですが、せっかく応援練習をして、在籍3年間に一度も硬式野球部定期戦に勝利したことがないのは、生徒に対して申し訳ない気持ちになります。もちろん、いつも勝つわけにはいかないし、負けることから学ぶことは多いでしょう。しかしながら、せめて、3年間に一度くらいは、在籍している3年間に一度くらいは、勝利して、自分たちのやってきたことの意味を十分に確認させたいと思います。

学校として部活動の強化の要素は複数あります。練習環境、指導体制、生徒募集等さまざまございます。これまで学校として部活動の強化に努めてきました。今後さらに学校としてやるだけのことはやっていきたいと思っております。このような事情を鑑みて、部活動の強化についてのご理解とご協力を仙台二高同窓会、その他関係者の皆様をお願いする次第です。



本校HPQR